

広池千九郎博士と矢納幸吉会長

—— 出会いの前後の事蹟とその意義について ——

立木 教 夫

目 次

- 一、はじめに
- 二、出会いを準備したもの
 - (一) 病から宗教を求めていたこと
 - (二) 天理教の調査
- 三、出会ひ
- 四、矢納会長を通して理解した天理教教理の特色と天理教教祖の事蹟
 - (一) 天理教教理の特色
 - (二) 天理教教祖の事蹟の研究
- 五、天理教入信時期
 - (一) 時期
 - (二) 理由
- 六、二見今一色の人心救済
- 七、むすび——最高道德実践論との関係

一、はじめに

広池千九郎博士が天理教勢山支教会の矢納幸吉会長との出会いを得たのは、明治四十二年（一九〇九年）、広池博士四十三歳、矢納会長五十八歳の時である。二人の交流は、このときから、矢納会長が逝去する大正三年（一九一四年）、広池博士四十八歳、矢納会長六十三歳に至る、実質五年に満たないわずかの期間であった。⁽¹⁾ あるいは

さらに交流の密度に注目して、大正二年一月二十五日に広池博士が天理教本部に入るまでの四年足らずの期間であつたというほうが、適切かもしれない。短期間ではあるが、この間に、広池博士は矢納会長との親交を通じて、それまでの学者・教育者としての活動に加えて、救済者としての面を切り拓いていくことになるわけで、非常に重要な時期である。

矢納会長との親交がどれほど重要であつたかを示唆する事蹟を一つ、指摘しておこう。広池博士が逝去する前年の昭和十二年一月六日の『広池千九郎日記』（第六冊目）には、「さて予は一昨年専攻塾、昨年谷川開設のため心身ともに疲れ、ほとんど回復の見込みも立たぬほど弱れり。然るに本年、予の九星は旭日昇天の年とあり。右に付き、三日、左の決心を神明に誓う」として、その誓いの第三番目に、

「予の今日あるは、一つは勢山故会長矢納幸吉翁のおかげなり。よつて今回参拝して故会長の霊を拝し、御神饌一千円を献じ、教会役員一同に挨拶すること」

と記されている。この報恩は、矢納会長が逝去してから二十三年後におこなわれたものである。この間も、広池博士は継続的に報恩をおこなってきたが、ここでは一千円という大金を献じたのである。一千円というお金は、その当時、東京の山の手に土地付きの二階建ての家を購入できるほどの価値を有していたといふ。五日後の一月十一日には、「朝、勢山へ参拝し御神饌を献ず。一同大いに喜ばる。予も心身ともに助かる心地す」とあり、六日の誓いが実行されたことがわかる。

この『日記』の記事一つをとつても、矢納会長は広池博士にとって特別の恩人であつたこと、そして、その恩人にたいする報恩が広池博士の最晩年まで継続されていたことがわかるのである。

本小論では、広池博士と矢納会長の出会いの前後に焦点を絞り、事蹟的解明を試みると同時に、なぜ矢納会長

が広池博士にとって生涯恩人であり続けたのかを、最高道德実践論とのかかわりにおいて考察することにした。

〈注〉

- (1) 広池千九郎著『回顧録』広池学園出版部、一九九一年、五九ページ。
(2) モラロジー研究所研究部広池博士研究室の栗原英二『日記』⑥と略記する』広池学園出版部、一九八八年、二二五—二二六ページ。
(3) 広池千九郎著『広池千九郎日記』（第六冊目）以下、

二、出会いを準備したもの

広池博士と矢納会長の出会いは、どのような状況のもとで成立したのであろうか。広池博士の側については、すくなくとも二つ、要因を指摘することができる。すなわち、一つは、長年に亘って抱えてきた病との関係で宗教を求めていたこと、そしてもう一つは、神宮皇学館の授業との関連で天理教の調査をおこなっていたことである。

(一) 病から宗教を求めていたこと

広池博士は、明治四十年に伊勢の神宮皇学館に単身赴任してから、明治四十二年頃までの健康状態の悪化を、次のように述べている。

「職務は神宮皇学館の教授で、授業は一週四、五時間にすぎないのであります。そこで二見が浦に下宿し

て白砂青松の間に起臥し、もって心身の静養に努めました。しかしながら、このときに当たっては、全身の神経衰弱すでにその極度に達し、夜間静かに寝に就きて眼を閉するときには、その心身の衰弱を感ずることにはなほだしく、大患の不日に襲来すべきことを自覚せずにはおられなかったのであります。ただし肉体の摂生法につきましては、従来相当の滋養物を食するのみならず、あらゆる滋養薬を用い、かつ健康増進の方法を実行し、いやしくも肉体に害あるものをば極度に節制し、かつ神に対する敬虔無二の信仰を持し、あらゆる点より肉体の保存を図ってきた結果が右のとおりでありますから、ここに至っては、百計尽きて寒心に堪えざる状態でありました。⁽⁴⁾

ここには、これまで「敬虔無二の信仰」をはじめとし、さまざまな方法を採用しながら、健康に注意してきたにもかかわらず、「百計尽きて寒心に堪えざる状態」、すなわち、ありとあらゆる手段を講じてみたがすべて効果なく、おそれおののき心が寒くなるという絶望的状况にあったことが、記されている。

このような絶望的状况にあつて広池博士は、一九〇九年すなわち明治四十二年の頃には、「痛切に」、信仰を求め心になつたと述べている。

「これがために痛く神経衰弱を起こしておつたので、あらゆる療養を加えたれど、身体を強壯に改造する根本の薬というものはないので。そこで一九〇九年の頃に至っては、どうしても宗教の力でなくては、このままに生命を保持して、自分の専門学を大成する事は出来ぬものと考えまして、それからいろいろ日本の内外における宗教の知識は持つておりましたれど、真に信仰を求めた事はなかつたのですが、しかし私の父は祖父以来、浄土真宗の深い信者で、著述まで残してある位（この著述は近近出版致します）ですから、私には宗教の信仰の遺伝も、家庭教育も十分にあります上に、私の家もと神官の家筋にて、私は幼少より敬神

の念に富み、伊勢神宮には十九年間も奉仕しております次第ですから、今回は痛切にこれを求むる心になり、これがために始めてソクラテス・キリスト・釈迦・孔子及び日本の古神道の精神を代表せる天祖を始め、世界諸聖人と称せらるる所の神人一致の域に達せらるる御方方のみ心を悟らしていただきましたが、しかしいまだ私の精神の中にはコンバージョンの曙光が輝いておるのみで、真のコンバージョンが出来ておらなかつたのです。⁽⁵⁾

ここには注目すべきことが、いくつか語られている。第一は、あくまでも目標は自分の専門学、すなわち法制史研究の大成であり、その目標実現のために信仰を得て生命を維持していきたいということ、第二は、宗教の信仰はこれまで痛切に求めたことはなかつたが、しかし、すでに幼少の頃より信仰のなかで育てられてきたので、十分に身についていたということ、第三は、信仰を痛切に求めるということで、広池博士は、神人一致の域に達した世界諸聖人の心を悟るところまで到達していたこと、第四は、広池博士の精神は未だ真の更生を実現し得ていなかったということである。

広池博士は、世界諸聖人の心を悟るというアプローチで宗教を求めていたことがわかる。そして、この時点では、「コンバージョンの曙光が輝いておるのみで、真のコンバージョンが出来ておらなかつた」としているが、これは裏を返せば、すでに真のコンバージョン実現までほんのわずかの地点に到達していたということでもある。このような精神的・身体的状況下で、広池博士は矢納会長に会うこととなつたのである。

(二) 天理教の調査

広池博士と矢納会長の出会いをもたらしたもう一つの要因である、天理教調査をみていくことにしよう。まず

はじめに、調査に関連する主な項目を年代順に示しておく。

明治四十一年五月頃

現代神道の調査をする

明治四十二年三月

「天理教本部」⁽⁶⁾
「本部行き」

明治四十二年十一月十一日

「古市うつり、同時信仰」⁽⁷⁾

明治四十二年十一月十一日から二十日の間

はじめて勢山支教会に行き矢納会長に面会

広池博士は、明治四十二年三月に調査のため、天理教本部を訪れた。これは、広池博士が神宮皇学館において憲法と神道史の講義を担当することになったことから、現代の神道各派の調査も必要となり、その一環としておこなわれたものである。天理教本部でおこなった調査では、広池博士が質問をし、それに中山真之亮天理教初代管長らが答えるというものであった。質問の内容は不明であるが、質問にたいして教義に関する書籍を示したということから、質問の内容は教義に関するものであったと推測される。この調査の後、広池博士は、教典の学問的研究や教徒の道德実行に関する調査に着手している。天理教教祖に関する関心が表明されてくるのは、さら以後のことである⁽⁸⁾。

明治四十二年十一月十一日の「古市うつり、同時信仰」という「日記」の記事に移ろう。この時期の遺稿を参照してみると、古市に移った理由は天理教調査と深く関係していることがわかる。

「一、明治四十一年 支那より帰朝後、二見の浦に滞在中、天理教の状況を調査す。一、同四十二年一月十日^(*) これより前、天理教の性質を知り、この日、なおこれを調査せんが為に、宇治山田市古市の講元服部てい子の宅に下宿し、はじめて勢山支教会に紹介せらる。……」⁽⁹⁾

*ここに「同四十二年一月十日」とあるが、この日付は、「同四十二年十一月十一日」の間違えであろう。

「古市うつり」とは、それまで手掛けてきた天理教調査をさらに徹底的におこなうために、古市の服部宅に下宿することに決定し、移ったということである。

さらに重大なことは、「同時信仰」とあることである。古市に移ると同時に、広池博士は天理教の信仰を開始したと述べている。しかし、この「同時」という言葉が意味するところは、それほど明確ではない。なぜなら、信仰を開始するきっかけとの関係で同時性をとらえてみるなら、この同時という言葉は解釈において、すくなくとも二つの可能性を孕んでいることがわかるからである。

第一の解釈は、服部宅に下宿して「始めて天理教の話聞き」⁽¹⁰⁾、それと同時に信仰を開始した、とするものである。これには、下宿しながら服部テイさんをはじめとする天理教信徒の様子をつぶさに観察し、天理教の良さを自分の目で確かめたことも、大いに関係しているものと思われる。

第二の解釈としては、古市に移ってただちに勢山支教会の矢納会長を訪問し、天理教に関する調査をおこなった、そしてそれと同時に信仰を開始した、とするものである。しかし、「勢山支教会の熱心なる信徒の家に転居し、その信徒の案内によりて教会に行き、会長矢納幸吉氏に面会して該教の教理を聴」⁽¹¹⁾いたという順序であったことはわかって、これ以上詳しく、どのくらいの時間が経過してから面会に行ったのかということ、わからない。

この「同時信仰」という問題は、後に取り上げることになる入信の時期とも深く関係している問題である。

〈注〉

(4) 広池千九郎著『回顧録』、三―四ページ、昭和四年。

題)、大正八―十五年。

(5) 遺稿「モラル・サイエンスと最高道德の伝統」(仮

(6) 広池千九郎著『日記』①八一ページ。

- (7) 『日記』①八一ページ。
 (8) 遺稿「天理教の真相(天理教調査大要)」(仮題)、明治四十二年十一月二十日。
 (9) 遺稿「広池博士入信談」、大正不明。
 (10) 遺稿「天理教入信と本部入りの原因と動機について」(仮題)、大正三年。
 (11) 『回顧録』、四ページ、昭和四年。

三、出会い

広池博士と矢納会長の出会いは、広池博士が服部宅に移った明治四十二年十一月十一日から同月二十日の間に成立している。

広池博士が服部テイさんの紹介で矢納会長を訪問したときの様子を、矢納会長の養女リキさんは、次のように回顧している。

「あの、人力にお乗りなりましたな、それで、古市の方から訪ねてお越し下さって。どんなお方かなーと。今まで見たこともないようなお人がおいでになったわと、私に会長さんがいわれまして、どんなお人ですやろなあというてましたら、ようおいで下さってな……」⁽¹²⁾

この発言から、この時が初回であり、これ以前に広池博士が矢納会長と出会っているという可能性はないことがわかる。

広池博士は、この初めての訪問のときの様子を、次のように表現している。

「子の付くや、驚喜して歓迎してくれた」⁽¹³⁾

「私を勢山支教会へ紹介して呉れますと、教会では大へん喜び又驚きまして、懇切丁寧に教理を話して呉ま

した」⁽¹⁴⁾

矢納会長との出会いは、広池博士が天理教の信仰を求めていくなから得られた出会いではないことに注意しておかなければならない。この出会いはあくまでも、「公務の必要」から天理教の調査をおこなう過程で偶然得られたものであった。訪問の目的が天理教の調査であったからこそ、広池博士は教理に関する質問をし、矢納会長はそれについて「懇切丁寧」に答えたのであった。

しかし、このときの出会いは、単なる「公務の必要」の範囲を越えて、広池博士に強い印象を残した。広池博士は、「一たび伊勢神宮のお膝下に住する矢納幸吉といえる老宗教家に接して、まずその人格のなみなみならざる所に、一種いっぺからざる崇敬の念を起し」⁽¹⁵⁾たと、後に語っている。

〈注〉

- (12) 「博士の昔語を矢納リキさんを中心としての座談会」と題する昭和三十七年七月一日録音のテープ(No. 24)の筆稿資料より引用。
 (13) 広池千九郎著『日記』①一四一ページ、大正元年。
 (14) 遺稿「天理教入信と本部入りの原因と動機について」(仮題)、大正三年。
 (15) 遺稿「モラル・サイエンスと最高道徳の伝統」(仮題)、大正八―十五年。

四、矢納会長を通して理解した天理教教祖の特色と天理教教祖の事蹟

この出会いの後、広池博士は矢納会長のもとへ「毎日毎日通う」⁽¹⁶⁾ようになり、信仰の方も次第に深くなっていた。広池博士は、信仰を二種類に分け、はじめ教理信仰が起り、次に教祖信仰に進んだと述べている。

「勢山支教会より、教理の御話を打ち明かし下されました。其他教理上の事柄を記した書物を見せて頂きました。之から教理信仰が起りまして、此所に初めて取上婆々、薬の無効、医者之言の実ならざることを感じ、尚世間の悪評を除かんが為、名古屋に到り各書店に命じて、天理教の悪評を記せる書物を取調べまして、悪評を防ぎました。而して教祖の人格を世に現わし、之と共に私は教祖を信仰する様になりました。之が教祖信仰の初めでありました。」⁽¹⁷⁾

(一) 天理教教理の特色

はじめに、広池博士の天理教教理にたいする理解をみていくことにする。

この問題に関しては、明治三十七年の大病にさかのぼり、病と信仰の問題がどのような関係にあったかをとらえなおしておく必要がある。明治三十七年に、広池博士は、仏教やキリスト教に信仰を求めたが、結局、信仰を得るところまではいかなかった。なぜ、信仰を得るに至らなかったのだろうか。後の「日記」の記事として、

「三十七年、宗教を信ぜんとして止めしこと。(1) 国体、(2) 科学、(3) 生命。三要素を要す。」⁽¹⁸⁾

と記している。つまり、広池博士は、これら三つの条件を満足する宗教を信仰の対象として求めていたのであり、仏教やキリスト教はこれら三つの条件を満足していないと判断したのであった。

ところが、この記事に引き続いて、「四十二年逢着す」と記している。つまり、明治四十二年にこれらの条件を満足する宗教である天理教に出会ったということである。広池博士は、天理教がいかに先の三条件を満足しているかを、次のように述べている。

「だんだん聞くと、これは噂に聞いたよりは善い、又進化論とも一致し学理にも合っている。世の中に悪評

する如きものではない。我國の歴史にそっくり合い、又天照皇大神の御心使いと、教祖の御心使い及び御功績、共にピッタリ符節が合つて居る。教理に於て斯くの如くであるに、其實際が会長、役員、信徒に至るまで、是迄に見ざる従順謙遜で、其教理を事実に見して居る。斯の如く教理が完備し、其實際が立派なのに非常に感じました。」⁽²⁰⁾

広池博士は天理教教理についてさらに、「聞けば聞くに従つて、愈其教理が深遠で……」⁽²¹⁾とも、あるいはまた、「教理はすこぶる卓越したものでありました」⁽²²⁾とも述べている。この教理の深遠性や卓越性の根源について、広池博士は、「その教理の神髄は世界諸聖人の教説に近きもの多く」⁽²³⁾という点を指摘している。この聖人の教説に近いものが多く含まれているということが重要である。というのは、広池博士は、聖人の精神に更生することによって、病を克服したいと考えていたからである。ここにおいて、広池博士は、天理教を自らの病を治すために適当な宗教に当たるととらえたのである。

(二) 天理教教祖の事蹟の研究

広池博士は、天理教教理の調査を進めていくなか、矢納会長の人格を通して、天理教教祖の人格を知ることとなった。

「予は矢納幸吉の人格を通して、教祖を知る。」⁽²⁴⁾

「矢納幸吉といえる老宗教家に接して、まずその人格のなみなみならざる所に、一種いふべからざる崇敬の念を起し、つづいてその人格は天理教教祖中山ミキ子の人格より来ておる事が分かつて、更にその人格を討尋するに当たり、ここに端なくも私の全精神を傾倒し、全人格を根本的に変化せしむる一大動機を得たの

であります。²⁵⁾

ここにある、「私の全精神を傾倒し、全人格を根本的に変化せしむる一大動機を得た」とは、どういうことだろうか。これは、天理教祖中山ミキ子の人格が、世界諸聖人の人格と相通する要素をもっているだけでなく、広池博士が明治三十年のころより手掛けてきた日本国体の淵源の研究と深く関連していることが判明し、年来の未解決問題に決定的な洞察を得たことを指しているのである。広池博士は、このことを、「天理教のしらべと国体上の大発見²⁶⁾」と記している。

この「国体上の大発見」は、「矢納幸吉氏の一言にて、天祖の御精神の偉大なる事を悟る²⁷⁾」とあるように、矢納会長の言葉がきっかけとなって、洞察が得られたことがわかる。その洞察はどのようなものであったのだろうか。広池博士は、大正四年六月十五日に認めた「伊勢神宮と我国体発刊の辞」において述べているように、すでに明治四十一年に『伊勢神宮』を出版した段階で、「我国体の淵源は天祖天照大神の御聖徳と歴代天皇の御聖徳とに存する事を証明²⁸⁾」するところまでは、到達していたのである。そしてそのあとに、次のように述べている。

「然りと雖も当時予は我国体の淵源に関する予の研究に就きては猶ほ心中竊に徹底せざる所あるを思ひ、研鑽頗る勉めたりしが、遂に得る所なくして止めり、然るに翌明治四十二年に至り図らずも予は一種の宗教的信仰を得たりしが、之によりて一日忽然、我国体の淵源たる天祖の御聖徳中天祖の天岩戸籠りの際発せられたる慈悲寛大自己反省の御偉徳こそ正に天祖御聖徳中の骨髓にして、これ宇内古今に匹儔なき名状すべからざる御偉徳にましまするなれとの事を考へ附き、爾来研究に研究を重ねて、いよいよ其の然る所以を明むる事を得るに至れり²⁹⁾」

ここにあるように、明治四十二年には、「猶ほ心中竊に徹底せざる所あるを思」っていたという問題点を解決し、「天祖の御聖徳中天祖の天岩戸籠りの際発せられたる慈悲寛大自己反省の御偉徳こそ正に天祖御聖徳中の骨髓」との理解に到達したのである。これこそ「矢納幸吉氏の一言」で得られた洞察であったと思われる。

では、矢納会長はどのようなことを語ったのであろうか。詳細は不明であるが、私は、天理教教祖の事蹟であつたらうと考えている。たとえば、広池博士は、矢納会長と出会った直後の明治四十二年十一月二十日の日付の入った遺稿で、「毫農中山善兵衛氏の夫人ミキ子という方が、天性慈悲寛大な性質から……³⁰⁾」と、「慈悲寛大」という言葉を天理教教祖の人格表現に用いており、また、大正八年から十五年の間に書かれたと推定される遺稿では、「天理教教祖中山ミキ子の嫁せる中山家は、大和地方の一大富農でありまして、幾多の婢僕を使用しておるのですが、このミキ子の実行は正に、恐多くも天照大神の天の岩戸こもりの時における御実行と同一であるのですなわちこれを一言に約すれば慈悲寛大自己反省³¹⁾であるのです」と、「慈悲寛大自己反省」という言葉を用いていることから窺えるのである。

広池博士は、矢納会長の人格↓天理教教祖の人格↓天照大神の精神の核心へと洞察を深めたことにより、年来抱いてきた日本国体の淵源に存在する精神的中核を明確にとらえることができたのである。

ひとたび天照大神の精神の核心を発見した広池博士は、天照大神の精神へとつらなるための実践を開始している。その具体的方法は、天理教の信者となり、天理の実行を為すことによつて、天照大神の精神につながるというものであった。

「私は十九箇年間に伊勢神宮に奉職して、専ら日本の国体の淵源を調査致しまして、日本の皇室の万世一系なるは、その祖先の御心・御行ないが天理に適しておつたのに本づくという事を研究し得てはおつたれど、天理という事がどのくらい偉大なものかという事は、まだ十分の確信ができずに迷っておつた際、天理教教

祖の事跡とその開教の結果とを調査してみ、始めて天理に適った心と行いと力の大きな事に心付きました。日本皇室の万世一系の原因は、天照大神の御聖徳にある事を確定する事を得るようになり、同時に天理教の信者になって、天理の実行を為そうと思立ったのであります。⁽³²⁾

あるいはまた、

「そこで私は世界の諸聖人を、今眼の当たりに再現させ、且つその諸聖人の聖徳を時代の要求に応ずる形式をもって、今眼の前に展開させたものごとく感激して、爾来私は天理教を信仰したのです。しかしその信仰は単に神様に自己の品性を完成させていただいて、世界の人類へ何物かを貢献さしていただけこうと思うより外、何の希望も目的もなかったのであります。⁽³³⁾」

と、実行の動機を述べている。

広池博士は、自分が抱えている病にたいしては、すでに「百計尽きた」との自覚を得ており、病を治すためには、自分の心を世界諸聖人が実現した心へと立て替えることによって、神の心につらなり、おのずと病が抜けるようにするほか方法はないと考えていた。それゆえ、天理教教祖の事蹟は、広池博士に世界諸聖人および天照大神の心を実現する可能性を指し示したという意味において、非常に重大な実践への動機づけを与えたのである。それゆえ、昭和四年には、

「しかるに私は親しく今回天理教教祖の実行とその信徒の実行とを見て、始めて世界諸聖人の教説を人間の精神作用及び行為に即してこれを実現することの可能性を悟ったので、私は全く暗夜に燈を得た感があったのであります。⁽³⁴⁾」

と回顧し、意義づけたのである。

〈注〉

- (16) 広池千九郎著『日記』①一四一ページ、大正元年。
- (17) 遺稿「誠を天に捧げる」(仮題)、明治四十五年一月四日。
- (18) 『日記』①二九七ページ、大正四年四月十一日。
- (19) 『日記』①二九七ページ、大正四年四月十一日。
- (20) 遺稿「天理教入信と本部入りの原因と動機について」(仮題)、大正三年。
- (21) 遺稿「天理教入信と本部入りの原因と動機について」(仮題)、大正三年。
- (22) 遺稿「予の大忠と天理教の入信」、昭和二年推定。
- (23) 広池千九郎著『回顧録』、四ページ、昭和四年。
- (24) 遺稿「神、聖人、教祖を現わすは、自己の人格なり」(仮題)、大正不明。
- (25) 遺稿「モラル・サイエンスと最高道德の伝統」(仮題)、大正八―十五年。
- (26) 『日記』③二六ページ、大正十一年十一月四日。
- (27) 遺稿「矢納幸吉氏の一言にて」(仮題)、大正八―五年。
- (28) 広池千九郎著『伊勢神宮と我団体』(『広池博士全集』④、広池学園事業部、一九三七年、二五―ページ)。
- (29) 『伊勢神宮と我団体』(前掲書、二六―ページ)。
- (30) 遺稿「天理教の真相(天理教調査大要)」(仮題)、明治四十二年十一月二十日。
- (31) 遺稿「モラル・サイエンスと最高道德の伝統」(仮題)、大正八―十五年。
- (32) 遺稿「天理教教理惣説」、大正七―十三年。
- (33) 遺稿「モラル・サイエンスと最高道德の伝統」(仮題)、大正八―十五年。
- (34) 『回顧録』、五ページ、昭和四年。

五、天理教入信

(一) 時期

広池博士はいつ天理教に入信したのであろうか。天理教入信の時期を調べてみると、いくつも異なった日付が

現れてくることに気づく。しかし、入信後に、入信のきっかけを与えた出来事を回顧的にとらえてみると、さまざまな出来事が入信の布石となっていたことに気付くことになる。それゆえ、入信の時期に関しては、布石との関係でさまざまな日付が現れてくるものと思われる。ここでは、いくつか代表的なものを挙げながら、考察を加えていくことにする。

第一は、明治四十二年春である。

「幸いにして明治四十二年春以降、窃に天理の教を奉ずることを得」⁽³⁵⁾

これは天理教に入信してから、天理教との出会いを振り返り、明治四十二年春、すなわち、同年三月に天理教本部を訪問したことの重要性を認め、この時点から天理教を「奉ずる」ことになったとしたものである。

『広池千九郎日記』第一冊目に収録された「広池信仰日記」のはじめの部分は、後にまとめて記されたものであるが、書き出しの記事は、「三月 本部分行き」^(天理教本部)である。つまり、信仰日記の最初の記事を「本部分行き」としたことに、このことのもつ意義が窺えるのである。

第二は、明治四十二年十月である。

「私は明治四十二年十月の大祭前に入信致したので教会は甲賀大教会賀茂分教会勢山支教会であります」⁽³⁶⁾

「去る明治四十二年十月天理教を信じ勢山支教会の信徒と為り……」⁽³⁷⁾

さて、十月に何があったのだろうか。広池博士は明治四十二年九月から十月にかけて、二見吸霞園に滞在していた。ここで、吸霞園で女中をしていた天理教信者の服部テイさんと出会っている。この出会いによって、天理教の信仰に導かれたとするなら、十月に入信したとしていることも理解出来ないことはない。

このほかにも、日付が明示されていないが、

「帰朝、二見、伊勢神宮、入信、矢納会長」⁽³⁸⁾

「(2)天理教の入信。(3)天理教のしらべと団体上の大発見。(4)二見の実験」⁽³⁹⁾

といった記述もある。もしこの順序が時間的に正しいものとするれば、広池博士は徹底した天理教の調査を行う前に、また、矢納会長と接触する前に天理教に入信したことになる。

第三は、明治四十二年冬である。

「明治四十二年冬、……教祖の偉大なる人格に感動し、併せて教祖の偉大なる人格に髣髴せんとして、真信仰の門に入りましたものですから……」⁽⁴⁰⁾

俗に冬というと、十二月、一月、二月の三か月を指す。天理教本部を訪れたのが明治四十二年の三月であるから、この場合、明治四十二年の一月、二月という可能性はない。よって、明治四十二年の十二月が候補として残ることになるであろう。

第四は、明治四十三年一月である。

「明治四十三年一月に信徒に加名し名簿を挙げたのであります」⁽⁴¹⁾

このとき入信の形式が整えられたということで、入信の時期確定にとつては最も明確な目安となっている。しかし、形式が確定する前に、すでに精神的には信仰に入り込んでいたことを、十分考慮しておかなくてはならない。

(二) 理由

天理教入信の理由を、広池博士は、次のようなさまざまな事柄との関連において述べている。

一、次には自然に勢山会長の誠に感じたから、又一般の人がよいから、又教理がよいから、天理教に入っ

たのです。

一、今一つは全く人を助くる心のなかつたのではない。社会問題にはよいと思つたのです。しかしこれは入信の原因にはならぬ。天理教を注意した原因にすぎぬ。⁽⁴²⁾

「天理教会〈勢山支教会〉会長矢納幸吉氏の高き品性に感じ、進んで天理教祖の人格及び教理を研究し、其世評と異なりて以外に優秀なる所あるに感激し、箇人として窃に之を信ずる事は、敢て差支なかるべしと思ひ、直ちに同教会の信徒と為れり。」⁽⁴³⁾

先に取り上げた「団体、生命、科学」といった三つの要素は、ここでは「天理教祖の人格」、「勢山会長の誠に感じたから、又一般の人がよいから」、「教理がよいから」といった記述の背後に十分とらえられているものと思われる。

またこのほかに、入信の理由としては、「生命を保つため」、あるいは、「身体の壮健を得べく」信仰したということも、述べられている。

「私の生命を保つためには極めて適當なる信仰として、遂に天理教の信仰にはいることになりました。」⁽⁴⁴⁾

「それまでは私のために信仰する、つまり持久戦のため身体の壮健を得べく第二の準備のため信仰に入るという訳であつたのですから、「天理教本部入りの要請は」余り有り難くない次第であつたのです。」⁽⁴⁵⁾

これらの記述から、あらためて、天理教入信は病を治すことを目的とした入信であつたことが確認できる。広池博士は世界諸聖人の心を実現することによって、病がおのずから治る道を模索していた。病を治して、専門学を大成したいと願つていたのである。そのような状況下で矢納会長に出会い、矢納会長の人格を通して、天理教教祖の人格に触れ、世界諸聖人の心を実現するための方法を悟つたのである。ここにおいて、広池博士は、病を治

すために痛切に求めていた宗教と出会つたのである。

〈注〉

- (35) 遺稿「学位取得にさいしての感想」(仮題)、大正元年。 (40) 広池千九郎著「日記」①二八八ページ、大正四年三月二十九日。
- (36) 広池千九郎著「広池博士講演集」編輯兼発行者山本千代蔵、大正八年、二六九―二七〇ページ。 (41) 遺稿「天理教入信と本部入りの原因と動機について」(仮題)、大正三年。
- (37) 遺稿「後日の為一筆覚書の証」、大正十五年十一月九日。 (42) 遺稿「入信告白」、大正三年。
- (38) 遺稿「新科学モラロジーを建設するに至れるまでの予の精神的生活の真記録」、昭和四年。 (43) 遺稿「博士の大患と天理教本部へ入りし事」(仮題)、昭和四年。
- (39) 「日記」③三六ページ、大正十一年十一月四日。 (44) 広池千九郎著「回顧録」、五ページ、昭和四年。
- (45) 「広池博士講演集」二九五ページ、大正八年。

六、二見今一色の人心救済

明治四十三年に、広池博士は最初の人心救済をおこなつた。

「今一色へ行き、松本初子を助く。これ御助けの初めなり。」⁽⁴⁶⁾

「一、……四十三年四月、二見の浦今一色の講元の月次祭に行き、始めて個人伝導をなす。」⁽⁴⁷⁾

この人心救済は広池博士にとって、どのような意味をもつていたのであろうか。広池博士は、病人を相手に、誠の心を説き、誠の心を沸き上げさせ、それによつておのずから病が治るよう導くことが可能であることを体験

したのである。⁽⁴⁶⁾そして、この実践を通して広池博士は、「誠の意味を了解し、会長の恩を知る」⁽⁴⁹⁾ことができた述べている。

まずはじめに、他者を相手に人心救済を手掛けたことよって、「誠」のもつ大きな可能性を知り得たのである。矢納会長の養女である矢納リキさんの話によれば、広池博士が誠の意味を悟ることになったこの人心救済の直前に、矢納会長と広池博士の間に次のような問答があったという。

「それで、始終に会長さんが、誠、誠とおっしゃる。それで広池先生が、会長さん、誠、誠と、あなたはおっしゃるんですけれども、その誠自身の誠ということは、どうも私はわかりません。会長さんは分かっています。いなさるで、私にそう言うて下さるけれども、私は真の誠というものは、どうも私は分かりませんとおっしゃった。真の誠ということは、死ぬか生きるかということへお助けに飛び込んで、何としてもこの人を助けさせて頂きたい、自分の寿命を縮めてでも、このお人は助けさせて頂きたいという、本当の腹の底から盛り上がってくる、これが真の誠である、といって、あなたもそういうところへぶつかつた時は、会長さんがいわれた、本当に自分の尊い命をただや縮めてでもこの人を救いたいという心になります。それが真の誠である。なかなか口でいうたぐらいで、誠ということは分かりそうはなはずがございません。そういう「聞き取れず」には、真の誠つちゆうものはできません。こう申しましたら、ああ成程そうかいなって、いっぺんそういうことにごさしてもらいたいものですな、て、広池先生がいうておられたつちゆうことは、二階から家にかえられてな、その話をしました。⁽⁴⁸⁾」

誠の意義をこのような形で説かれた広池博士は、「いっぺんそういうことにごさしてもらいたいものですな」と自ら希望し、人心救済を手掛けてみようとしたのである。このようにして人心救済を手掛けることにより、広池

博士は、世界諸聖人の教説の核心に存在する誠の心を体験的にとらえ得たのである。

〈注〉

- (46) 広池千九郎著『日記』①八一ページ、明治四十三年四月三日。
- (47) 遺稿「広池博士入信談」、大正不明。
- (48) 平成六年一月二十九日にモラロジー研究所柏生涯学習センターで開催された第二十一回「モラロジー研究発表会」で、「広池博士は松本初子さんにどのような話をされたのですか」との質問を頂戴したとき、「遺稿のなかにそのことに直接言及したものがないので正確なところはわかりません」と申し上げた。その後、研究会、昭和三十二年七月一日。
- (49) 遺稿「広池博士入信談」、大正不明。
- (50) 「博士の昔話を矢納リキさんを中心としての座談会」、昭和三十二年七月一日。

七、むすび——最高道徳実践論との関連

今回、広池博士の事蹟を、矢納会長との出会いを得る直前から二見今一色ではじめて人心救済を手がけるに至った範囲で、詳しくたどってきた。この事蹟の解明の先にまだ一つ、重要な問題が残されている。それは、なぜ矢納会長は、広池博士が生涯かけて報恩していくほど大切な恩人であり得たのか、という問題である。

私は、広池博士は矢納会長との出会いのごく初期の段階で、矢納会長の人格的感化を通して更生へと連なる体験を獲得し得たことが、その理由の一つであると理解している。

「しかるに今回、私は矢納会長に接触して、その卓越せる精神的感化を受け、かつ自らはじめて人心救済を
 実行した経験の結果、私の過去における信仰、道徳及び人生観は、ここに一大変化を起したのであります。
 すなわち前第一章にも一言せるごとくに、私は若年のころより、神仏を信ずると同時に、日本及び中国の古
 典をはじめ、浩瀚なる仏教の教典（漢訳による）及びキリスト教の教典を研究しておったのであります。が、
 いまだその真理を自己の精神及び行為に実現して、世界の人類を開発しかつ救済するときとは、夢にも
 考えておらなかつたことでもあります。しかるに今親しく人心救済を実行した結果、その年来体得せるところ
 の世界諸聖人の実現せるところの信仰及び道徳の原理は、躍如として私の精神の中にその潑刺たる生命を現
 出したのであります。かくて私ははじめて更生の途に上り、神の御心に救われることになったのでありま
 す。」⁽⁵¹⁾

広池博士は、矢納会長と出会う前から、聖人の教えを体得することによって病を自然に治したいと考えており、
 そのために、真剣に宗教を求めていた。そのようなときに出会った矢納会長は、聖人の教えを実践する際の心、
 すなわち「誠」の重要性を説き、誠の心になるための人心救済の場を設定してくれたのである。この人心救済を
 手掛けることにより、広池博士は、すでに年来体得していた「世界諸聖人の実現せるところの信仰及び道徳の原
 理」が「躍如として……精神の中にその潑刺たる生命を現出」するという、更生の境地を拓き得たのであった。
 聖人の教えを深くとらえていたからこそ、広池博士は大正元年の大患のピーク時に、

「今日の大患にては、とうてい生命のあるはずなけれど、もし神様が私に一年の生命を貸してくださいな
 らば、人心救済に関する世界諸聖人の真の教訓に本づくところの前人未踏の真理を書き遺しておきましょう。
 もしまた、さらにこれより永き生命をお貸しくださいませならば、当年一月四日お地場にて誓いしごとくに、

私の学問、名譽及び社会の地位全部を神様に献納し、生きたるままに神前の犠牲となつて人心救済をさして
 頂き、全人類の安心、幸福及び人類社会永遠の平和の実現に努力させて頂きましょう。」⁽⁵²⁾

と誓つたのである。つまり、後に文字によって表現されることになる実際の・体験的理解をすでに獲得していた
 からこそ、このような誓いがおこなわれたのである。この誓いは、十七年後の昭和三年に、「道徳科学の論文」と
 して結実してことになるのである。

では、あらためて、広池博士が矢納会長との出会いのなかからつかみとつた聖人の教説の核心は、「論文」にお
 いてどのような形で展開されているのであろうか。この問題は、道徳実践が成立する基盤としてとらえられてい
 る「自然」、あるいは「自然の法則」を手掛かりとすることによって、次のように構造化してとらえることができる。

広池博士は、「神と宇宙と自然との同一なること」⁽⁵³⁾としていた。その上で、「この宇宙及び人類社会を支配する
 大自然の法則は太初（たいしよ）の神（本）の建設的努力にその端を発し」⁽⁵⁴⁾たものであるとして、「太初（たいしよ）の神（本）の建設
 的努力にその端を発し」た「大自然の法則」の存在を明らかにしている。ここにおける広池博士の自然は、一方
 において、近代西洋で形成された自然（nature）の意味での客観的自然を含み、他方において、古来、東洋で形
 成されてきた「おのずからなる」あるいは「おのずからしかる」という意味での自然を含んだうえで、両者が統
 合されるさらに包括的な自然を意味している。

自然と人間の関係については、「われわれ人間は自然界の力（神）によりて自然界に生まれ出で、自然の力（神）
 の力により養育されつつある」⁽⁵⁵⁾、あるいは、「私も人間は、既述のごとくに、この宇宙の自然界に発生したる
 現象の一つであつて、この自然界の支配を受けて生存・発達もしくは変化を遂ぐる」⁽⁵⁶⁾ものであるから、人間が生
 存・発達していくためには、「宇宙間に産出してこの間に生存するところのわれわれ人間としては、この宇宙自然

の法則に従わねばならぬことは明らかであります」と、自然の法則に従うことの重要性が示されている。

人間は自然のなかに生まれてきたからといって、無条件的に自然の法則に合致しうるわけではない。すなわち、人間は精神作用や行為において、自然の法則に違反し、疎外態、すなわちエス・トレインジメント (estrangement) と化してしまうのである。広池博士は、自然の法則にたいする背反は運命に現れてくるとして、「精神作用及び行為にして自然の法則及びその他の諸法則に背反する部分が、みな……運命のいずれの部分にか現れてきて不幸を呈しておるのであります」ととらえた。

人間は、このような不幸から脱出し得るのであろうか。すなわち、自然の法則からはずれてしまった人間は、救済され得るのであろうか。この問題にたいして、最高道德の立場はどのように答えるのであろうか。最高道德実践論においては、救済の問題は、自然の法則に立ち返り得るか否かの問題である。広池博士は、自然の法則に立ち返り得ることを実際に示したのは聖人であるとして、「聖人は上に向かっては神の心すなわち自然の法則に従い、下に向かっては一般の民衆及び一切万有の要求に従い、もって天功を助けた」と述べている。そして、「諸聖人の開示せる教説及び事跡に一貫する原理としての最高道德は天地自然の法則にほかならぬ」と、自然の法則としての最高道德の存在を明示するのである。

このように、聖人が説いた教えによるなら自然の法則に回帰し得るのであるが、ここに重大な問題があったのである。つまり、「古聖人は古代において躬親ら厚く最高道德を實行したまいしも、中古以来ほとんど湮滅しておったのであります」とあるように、聖人の教えの核心にあった最高道德的実践は、長く湮滅していたこと、またそのために、いかにして自然の法則に回帰したらよいのかがわからなくなっていたというのである。

広池博士は、そのように長く湮滅していた古聖人の最高道德を発見し、これを学問的に体系化しモラロジーと命名したのである。たとえば、「今回私が永年これを研究の上、更に永い年月間親しく実行させていただいたので、この最高道德の生命が再びかように世界人類の間に甦ってきたのであります」とも、あるいはまた、「いまや聖人を距ること年月久しくして、その最高道德の内容・実質及びその実行の具体的方法全く不明瞭になってしまつて、これを時代に適合する最善の方法をもつて世界の人類に首肯させて、これを開発することをなし得るものがないようになりおわつておつたのであります。それを、不肖且つ不徳ながら、私が多年の研究と実行とによりて、そのいわゆる聖人正統の知徳一体の内容と実質とを具備するところの最高道德を新科学モラロジーに組み立て、はじめてこれを時代の要求に応ずることにいたしましたのであります」とも述べている。

このようにして広池博士が発見した聖人の最高道德では、自然の法則からはずれてしまった人間が再び自然の法則に回帰するためには、どのような実践が必要とされるのであろうか。広池博士は、実践における核心は精神にあるとして、これを、「慈悲の心が真に自然の法則に適うのであります」とも、あるいはまた、「もし人間の至誠心が徹底して、いわゆる神へ本体の心たる自然の大法則に一致したらんには、その結果は、天地をして感動せしめ、超人的の好果を得るに至るものと教えられておるのであります」とも、述べている。ここに、自然の法則に回帰するためには、「慈悲の心」や「至誠心」といった心——先の事蹟的考察では、「誠の心」として注目したものの——の重要性が浮かび上がってくるのである。

広池博士は、明治四十二年から四十三年の段階で、矢納会長との出会いのなかから、まず他者の病を治すことによつて、誠の意味を体験的に学び、次いで、誠の心になる実践を通して自らの病を治すことになるのである。心を誠にするということは、すなわち、自然の法則からはずれた状態から自然の法則に回帰することであった。このようにして、精神作用及び行為において自然の法則からはずれて不幸が現出している状況下であっても、再

び自然の法則へと回帰し得ること、しかも、自然の法則に合致するならばおのずと救済されることを身をもって証したのである。

広池博士は、矢納会長を、「更生の途へと上り、神の御心に救われることになった」最初の人心救済の場を設定し、最高道德実践へと導いてくれた恩人として、生涯、報恩を継続したのであった。

〈注〉

- | | | | |
|------|-------------------------------|------|-------------------|
| (51) | 広池千九郎著『回顧録』、一五ページ、昭和四年。 | (58) | 『論文』⑨、二〇八ページ。 |
| (52) | 『回顧録』、二八ページ。 | (59) | 『論文』⑦、四〇四ページ。 |
| (53) | 広池千九郎著『道德科学の論文』⑦、二四七ページ、昭和三年。 | (60) | 『論文』⑧、六一ページ。 |
| (54) | 『論文』⑦、四二二ページ。 | (61) | 『論文』⑦、三六三ページ。 |
| (55) | 『論文』⑧、二二二ページ。 | (62) | 『論文』⑦、三六三―三六四ページ。 |
| (56) | 『論文』⑦、一七〇ページ。 | (63) | 『論文』⑦、三六五ページ。 |
| (57) | 『論文』①、序二ページ。 | (64) | 『論文』⑧、二三〇ページ。 |
| | | (65) | 『論文』⑥、二二三ページ。 |

*本稿は、モラロジー研究所柏生涯学習センター（一九九四年一月二十九・三十日）とモラロジー研究所大阪講堂（一九九四年二月二十七日）において開催された、第二十一回「モラロジー研究発表会」の発表原稿を大幅に書き改めたものである。